

05

# まちを残す

people talk about  
what they do

港まちに暮らす人々の「個人的な」エピソードを集積しながら、現代的な都市のまちづくりを思考・実践するアーカイブプロジェクト第5弾。今回は、「まちを残す | people talk about what they do」を展覧会タイトルとしました。

触るな、離れろ、疑え…。突如として現れた未知のウイルスによって、これまでとは異なる類いの混乱に直面している私たちは、呆然としてなす術を見失っています。人の気配がないまち並みは薄寒く、寂しさが胸に迫ってきます。けれど、ゆっくりとまちを歩き、出会う人々との距離を確かめつつ視線を交わせば、マスク越しのコミュニケーションにも温かな滋養が感じられます。

今だからこそ、聞こえてくる声があり、残しておかなければならない未来への記憶があるのではないか。そんな仮説を思考し、私たちは再び人々のエピソードに耳を傾けることにしました。コロナ禍における人々の語りは、明るいものばかりではありませんが、リアルなまちの姿に影は付きもので、それとどう向き合うのかにこそ本物の物語があるように感じています。

プロジェクト始動から5年目の節目を迎える本展では、プロジェクトの総括を試みると同時に、今後の行く末を試行する実験的な取り組みにもじっくりと挑戦していきます。この実践そのものが、次なる活動を拓くことを信じて。

